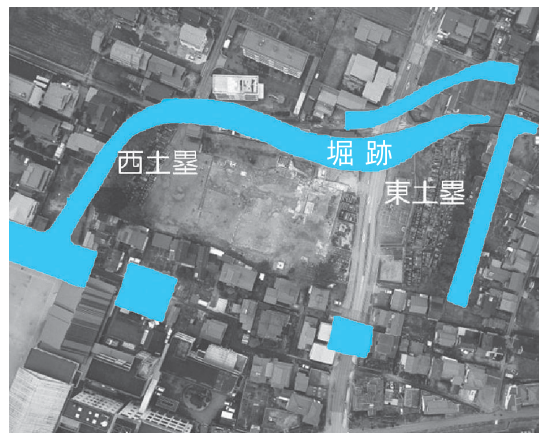


殿様の館 “三宅御土居”

三宅御土居は中世益田氏の館でした。南北朝時代(今から約650年前)に十一代兼見によって築造され、関ヶ原の戦いの後に益田氏が須佐へ移るまで、政治の拠点として繁栄しました。

館の東西には高さ約5mの土塁(防御用の土盛り)が築かれ、その周りは堀や川によって守られていました。堀を除く敷地の東西は最大190m、南北は最大110mで、一町(約100m)四方といわれる通常の館のほぼ倍の大きさであり、益田氏の力の大きさをうかがうことができます。館の東よりの道路を建設する際に発掘調査が行われ、数多くの貴重な遺構(人々の生活の痕跡)や遺物(昔の道具など)が発見されました。その後、発泡スチロールを用いた特



三宅御土居の周りには堀が巡っていましたが。堀は最大で幅16m、深さは3mの大規模なものです。

殊な工法で道路が整備され、遺跡は現在も道路の下で当時のままに眠っています。おどい広場には説明板とともに、建物跡や井戸跡など、発見された遺構の一部が復元されています。平成16年には七尾城跡とあわせて、「益田氏城館跡」として国の史跡に指定されました。そして将来的な史跡整備のために、平成17年度より土地買上げに取り組んでいます。

また、平成20年度からは、かつての館の姿を解明し、今後の整備方法について検討するために、発掘調査が続けられています。調査の結果、かつては南側にも土塁が存在していたことや、館の敷地が徐々に拡張されていた様子など、新しい事実が次々とわかってきています。



江戸時代に描かれた「益田氏御殿略図」によると、御土居には御殿や庭、蔵、政治を行う邑政堂などの建物が建ち並んでいました。

※お詫びと訂正
8月号掲載の中世益田講座で誤りがありました。お詫びして訂正します。
誤 21代 広兼 ↓ 正 21代 元堯